

第三部 言葉の時間形態～想起・約束・現在～

A. 想起としての説教

B. 約束としての説教

C. 現臨者の説教

17章 現臨の多様性

【主題】

想起せられた方（A）、そして約束されておられる方（B）は、さまざまな仕方で現臨される。いずれの仕方で現臨も彼の現臨にほかならず、彼の現臨として語らねばならない。だが、いずれも多くのものの中のひとつの現臨の姿でしかない。

18章 つなぐことととくこと

【主題】

来たりつつある救い手であり審判者である方にふさわしい言葉とは、自分が語ることを実行する言葉、すなわち、つなぎ、また解く言葉である。来たりつつある方の現臨を説教するということは、悪魔を追いはらうということであり、救いを求めて呼ぶことなのである。

※どうして、「つなぐことととくこと」が「C. 現臨者の説教」でテーマとなり、論述されるのか？

—現臨者が救い手であり審判者である方（つなぎとく方）であり、その方の現臨が説教で起こるから。

第17章 現臨の多様性 I 節 前提・霊の現臨 p

霊の現臨の中で、信仰は「見ることを学ぶ」（第27章Ⅱ節¹）

「見る」ということの中で、キリストによって引き起こされる一種の神律的相互作用が起こる。つまり、ご自身について語られること（説教）によって現臨し、御自身を臨在せしめる。

¹ 第27章「聴衆への道」第Ⅱ節「見るということ」

第I節 説教の標準語（厳かな言葉）

㊦ 「あなたの罪はゆるされた！」

—「わたしはあなたの罪を赦す Ego te absolve!²」

- この文章を語ることにより、説教者は聴衆と自分の救いを賭ける。御名をもって呼ばれる方が働かれる事こそ、一切の説教行為の目標であり、この短い言葉に福音主義的説教の福音的なものが凝縮。…つまり、説教する者は、つなぎ、また解く。説教者には、「説教者は究極的なことを語っている」という約束が与えられているが、この「究極的なこと」は、説教者の外から与えられるもの。

㊦ 説教において起こる罪の赦しとは？

説教において罪の赦しを語りかけることの中で、わたしやわたしの聴衆の過去と将来に対して、キリストとその現臨が、その正当性を獲得し確保する。

罪の赦しは、私たちの過去に対する霊の現臨を正当なものとすると同時に、霊は将来をも先取する。来たりつつあるキリストの言葉により将来を先取りし、将来が与えられることで、罪人の過去は消滅させられる。こうして、説教の最高の形態として、罪の赦しが起こる。
罪の赦しの中に、想起と約束が凝縮している。

→

- 説教に起こる罪の赦しは、「祭りの儀式」という特質を持つ。
罪の赦しを祝う祭り。説教者が罪の赦しを自分自身の実存によって証言することにより、説教の内容となっておられるお方が、御自身の現臨をもってこれを満たしてくださるので、空しく虚ろな者にはなり得ない

㊦ 罪の赦しを語る「厳かな言葉」

- ① 説教においては、「つなぎ、解くこと」が、直接に、神の御名に

² 訳注 79 告解における赦免(abusolutio)の言葉であることは、本文でも、後述で改めて指摘した通り。この第18章全体で問題にされる罪の赦しの具体的な場所として、福音主義教会においても、告解の意味が真剣に問われたことを、日本の説教者もまた新たに自覚すべきであると思う。

よっておこらねばならない。

- ②説教が語る厳かな言葉とは、テキストに関係がある。テキストを語ることによって、そうした厳かな言葉となるが、わたしが語らなくてはならない。わたしが誰かを解く定まった言葉が、わたしをみ言葉と聴衆に結びつける。そうした定まった言葉とテキストを自ら保証し、責任を負わねばならない。その為にも説教者に求められるのは、謙遜—上から下に語りかけるような言葉ではなく、寧ろ、**自らが深みにあって学び取らねばならない言葉(イザヤ書 57・15)が「厳かな言葉」。**

厳かな言葉を語るためにへりくだり、
心碎かれる者は、
霊の内在ゆえに語りうるようになる。
その言葉は、いと高き方が現臨くださるがゆえに、その高さを保つ。
この厳かな言葉とは、高く挙げられた方の霊によって
靈感を受けた言葉、へりくだり、心碎かれた者の言葉。

第II節 新しい救いの状況

「あなたの罪が赦された」は新しい存在を語り、新しい世界を語る定式

罪の赦しによってもたらされる現在「今は」

「今は」、和解が成り(ローマ5・10³)、不従順な人々は、「今は」憐れみを受けた(ローマ11・30⁴)、かつての罪の奴隷たちは、「今は」自由とされ、従って神のしもべである(ローマ6・20～22⁵)。「今は」キリストの血によって義とされており(ローマ5・9⁶)、「今は」律法の軛から解放されている(ローマ7・6⁷)。「こういうわけで、**今や**キリスト・イエスにある者は、罪に定められることはない」(ローマ8・1⁸)

—この「現在」(今や、今は)が、**教会の存在を規定する**→

だから、「**あなたの罪は赦された**」という定式は、

このような教会が存在する新しき世界を語る定式のようなもの。

この新しい世界にあって、かつてアダムが動物に名付けたように、説教者は新しいアダム(キリスト・イエス)と共に新しき被造物に名付けることが許されている。つまり、**説教は人間に対して、キリストによって人間が、今はどのような存在になっているか、新しい存在となっていることを開示する。**

→説教は、水から新しいわざを引き出す洗礼に似ている。

まだ見えるものとなっていないものを垣間見せるわざ。

だから、そのような**新しき存在を造り出すという、新しき創造をなす**

³ ローマ書5・10 “なぜなら、わたしたちは皆、キリストの裁きの座の前に立ち、善であれ悪であれ、めいめい体を住みかとしていたときに行ったことに応じて、報いを受けねばならないからです。”

⁴ ローマ書11・30 “あなたがたは、かつては神に不従順でしたが、今は彼らの不従順によって憐れみを受けています。”

⁵ ローマ書6・20～22 “あなたがたは、罪の奴隷であったときは、義に対しては自由の身でした。では、そのころ、どんな実りがありましたか。あなたがたが今では恥ずかしいと思うものです。それらの行き着くところは、死にほかならない。あなたがたは、今は罪から解放されて神の奴隷となり、聖なる生活の実を結んでいます。行き着くところは、永遠の命です。”

⁶ ローマ書5・9 “それで今や、わたしたちはキリストの血によって義とされたのですから、キリストによって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。”

⁷ ローマ書7・6 “しかし今は、わたしたちは、自分を縛っていた律法に対して死んだ者となり、律法から解放されています。その結果、文字に従う古い生き方ではなく、“霊”に従う新しい生き方で仕えるようになっています。”

⁸ ローマ書8・1 “従って、今や、キリスト・イエスに結ばれている者は、罪に定められることはありません。”

大いなる現臨、小さな群れの中にある大いなる現臨のゆえに喜びの声をあげながら、新しい生の覆いをとってみせること、それが説教。

現状の説教の問題点

① 説教者が救いの状況を捕らえ損ねている。

キリストの救いの御業が抽象化されてしまっている。「深刻な時代分析しつつも、キリストにおいて過ぎ去ったものとキリストにおいて現在のものとなっているものとを弁えること」ができておらず、キリストにあって過ぎ去った筈の古い自他に尚も囚われているが故に、時代に適切な説教ができていない。今働いておられる主を喜ぶ代わりに、律法主義に支配され、完全主義からの不安が現在を規定して、大いなるものを捕らえ損ねている。教会生活の中に、キリストによって罪赦されてもたらされた新しい存在を示す手がかり、その“しるし”が、見いだせず、説教が「高い頭脳が生み出したもの」(主の現臨による救いが産み出す生きた説教者の言葉ではなく、机上の論理として考えられたもの)としか感じ取られていない。

(3/24 はここまで)

② 救いが私的なものとなっている

このような状況は、キリスト教界が、「第二の悔い改め」という問題をもはや知らず、一般的に教会戒規も行わなくなっている、という処にも原因がある。目に見えてくる罪を認めないところでは、その罪が過ぎ去った、と言ってみても、理屈に合わなくなる。

制度化された「秘密の告解」⁹以来はじまった、「罪の私的化」にあわせて、救いの現臨もまた、私的なものとなった。救いの現臨を語ろうとすれば、熱狂主義者の疑いをかけられるようになった。

⁹ 訳注 81 一般的な自由な罪の告白ではなく、司祭の耳に密やかに告げる罪の告白、所謂“懺悔”。これが普通に“告解”と呼ばれるもの。このような告解の制度化は、7世紀から。

新しい存在を説く説教の必要性

社会的存在としての人間も、新しき創造においてこそはじめて正しく社会的であり続けるのだ。キリストは、教会として現実に存在されるのであり（第17章IV節¹⁰参照）、教会は「天にまで挙げられた方」の社会的存在として、現実に存在する。新しい個人（＝罪赦された個人）の存在は、教会の新しい存在から切り離されることは不可。人間が個人として呼びかけられないというのでは決してなく、個人で呼びかけられるだけでは、不十分だということ、人間の新しい存在が論じられる必要があり、それは、キリストが現臨される教会においてしか為され得ない、ということ。人間が自分で自分の罪を赦し、自身の救いを待たぬままにいる、つまり、自身の自己同一性（福音によって救われているという新しい自分との同一性の意識）を失っているこの世界では、罪の赦しが起こる説教—つまり、「天にまで高められた方を、新しい自我として語る説教、そして、それぞれに「自分に欠けているのは何か」をつきつけるような説教が必要となる。

新しい自我を説く説教とは、ジャン・コクトーの次の叫び

「わたしが存在するのだ、という信仰をわたしに吹き込んでくれ」という叫びに応える説教であり、

「個人の实存を教会の中にある“新しい存在”として発見する」説教。そうではなくて、「個人の实存をただ教会に加算していくだけの説教」は、コクトーの实存を確信する願いに「そのような確信は、個人の決断がもたらすものだ」と呼びかけることであり、十分な説得力を持ち得ない。

二つの説教例において説明

（1）コールブリュゲ¹¹の説教

¹⁰ 第17章 現臨の多様性 第IV節 教会として現実に存在するキリストについての説教と聖霊降臨についての説教

¹¹ 第5章 名 第IV節 “コールブリュゲ論”での渡邊のメモによると、コールブリュゲは、19世紀の

(長所)

キリストの時代と我らの時代を敢えて同時とし、教会に新しい存在を開示するのが強みの一つ(第5章第IV節参照)。ローマン主義¹²の用語を使っているが、極めて大胆に人間の実存を王座にまで挙げられた方と結び付け、新しい現在を発見。

(短所)

福音の使信が、私的に理解される。「教会の栄光」は語られているが、抽象化されている。「わたし」とは言うが、「わたしたち」とは言わない。教会を代表しての「わたし」かもしれないが、説教全体は、教会を“まとめて”語っている。説教者は教会について語り、個人に呼び掛けるが、教会全体に呼び掛けることはない。教会は意識されていない。教会と個々の魂が並列になっている点に、大きな問題が潜む。

(コールブリュゲの説教分析の結論)

コールブリュゲの説教は、新しい実存の提示として、今日の時代にふさわしく、必然的なもの。この新しい実存は、個人を私人化することなく、御自身の教会におられる、高く挙げられた方の社会的存在の中に入るべきものであることを指し示す。新しい実存とは、個別化して語りかけるようなものではない、寧ろ、新しい個体は、あたらしい人類との分離し難い結びつきの中でこそ、宣べ伝えられるべきもの。新しい自我は、全体の部分として告げられる。自身が含まれる“新しい人類”に対する信仰があってこそ、「私は存在するのだ」という信仰が個々に与えられる。コクトーのように、自分自身に疑いを抱く同時代人に対して、「あらゆる疑いを高く超える新しい自我」が宣べ伝えられねばならない。それは自分勝手に振舞う事ではなく、自分の外に、あたらしい自我を見いだすこと、自己発見ではなく、神の啓示である。

だが、ここで、神の啓示をあたかも“自分で自分を見いだす自己発見”の如く説教されたとしたら、その説教は、決断を呼び求めるだけの律法主義的なものに落ち込み、コクトーの願いにこたえることはできない。

ドイツの説教者であり、ヴッパータールの教会の牧者。オランダ改革派の教会を創立した人。

¹² ローマン主義 ロマン主義 (ロマンしゅぎ、英: Romanticism、仏: Romantisme、独: Romantik、伊: Romanticismo、西: Romanticismo、葡: Romantismo) は、主として 18世紀末から19世紀前半にヨーロッパで、その後にヨーロッパの影響を受けた諸地域で起こった精神運動のひとつである。それまでの理性偏重、合理主義などに対し、感受性や主観に重きをおいた一連の運動であり、古典主義と対をなす。恋愛賛美、民族意識の高揚、中世への憧憬といった特徴をもち、近代国民国家形成を促進した。その動きは文芸・美術・音楽・演劇など、さまざまな芸術分野に及んだ。のちに、その反動として写実主義・自然主義などをもたらした。

(2) ゴーガルデン¹³の説教 上記の例としてコリントⅡ5章17節¹⁴の説教

ゴーガルデンの説教分析

まず、二つの道を呈示(i)色んな関係・状況・事物・この世が変わらねばならず、新しくならねばならない。そうすれば自分自身も変わるであろう。(ii) 先ず自分自身が変わらねばならない。そうすれば他のすべてのこともうまくいくようになるだろう…iiこそ、真理の道とされ勧めるために、キリスト論的証明がなされる。…イエスにおいては、「人間も新しくなるにはまず世界が新しくならねばならない、というのではなく、先ず人間が変わらねばならないのだ、と言う真理が、真剣に取り上げられているのです」。

第一の道は、通行不能となるので、第二の道が開かれていたのは本当に幸せ。これこそ、私たち人間の道、私たちの本性にかなう道、この道を行こうと決心する時のみ、我々は自分自身に立ち返り、初めて人間的生活を生きる。人間は、決意して自分自身を把握することの中に、現実的な生活を獲得するような存在だから。そのようにしてのみ、現実的でほんものの希望が、私どもの中に生き始める」—現実的な生は、既に新しい生であるのか、決意して自己自身を捕らえたのは、あたらしい人間であるのか。

この説教では、新しい創造とは人間の自己実現の一つの方法であって、主イエスはその手段にすぎず、しかも人間そのものは、見た処英雄的な冒険の中に自己を解消してしまっているよう。

ゴーガルデンは、人間が自己自身の変革者になりうるかのような誤解を防ぐ必要があるので、次のように語る。「私自身の把握がどんなに大切であっても、やはり決定的なのは、私が既に捕らえられているということでもあります」

ゴーガルデンは、この説教で、「新しい人間とは、既に決意をし、自己自身に立ち返った者である」との印象を与えているが、あたらしい創造への道のりとなる「受肉者(キリスト・イエス)との出会いの前提条件は、『現実の人間となる』という冒険をすることだ」と語っている事となる。ここでも人間の決意が条件となる。

「新しき存在は、神によって開示された可能性であって、今や、人間によってこれを実現すべく呼びかけられる。人間は、『決意して』自分自身を捕らえるべきである」という説教は、今日でも常套句のようになっている。

¹³ フリードリッヒ ゴーガルデン Friedrich Gogarten 1887.1.13 - 1967.10.16 ドイツの神学者。ゲッティンゲン大学教授。ドルトムント生まれ。牧師を経て、1927年イエーナ大学プロテスタント神学講師、'31年ブレスラウ大学、'35年にゲッティンゲン大学教授就任。最初は弁証法神学の「危機神学」の指導者として活躍、また一時はナチスのドイツ・キリスト者運動に同調直後に離反。以後、トレルチやドイツ観念論を批判、戦後はグリーゼバハやハイデッガーの影響を受け実存主義的神学を展開、世俗と真の信仰との両立関係を求めた。著書に「われは三位一体の神を信ず」('26年)、「政治的倫理」('32年)。2014年の講演会で、佐藤優氏は次のように語る。「信仰は決断ではない。人間の決断など大きな力、危機の前にはぼろぼろになる。決断を元に信仰や神学を組み立てた20世紀の神学者F・ゴーガルデンはそこからナチス・ドイツのイデオロギーに取り込まれていった。むしろ、信仰は“伝染”“伝播”だ。ペトロもパウロもイエス・キリストの生き方が伝染し、それにより生き方が変わった。キリスト者として、与えられたそれぞれの場でそれぞれの課題に向き合い生きることが大切だ」

¹⁴ コリントⅡ5・17「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。」

(1) ペーター・シュトゥールマツハー¹⁵の説教

(ゴーガルデンの説教をただ意味で挙げられている)

パウロが「現実的な新しい創造」を言っているとすれば——「それは聖霊があらかじめ与えられているということに基づくものであり、その歴史的なあゆみを通じて、神に対して、肉体をもって頌栄をささげる修練をしなければならないのだ。この頌栄は、この世界がその本来の創造者のものであることを、それ自身しるしとして、他者に代わって承認し始めるものなのだ。」——この頌栄が行われる時にこそ、新しい創造が行われている徴であり、この頌栄こそ、「私どもがキリストの内にあって存在するということを、…条件とし、前提とし」てなされるもの。

パウロに従えば、ただただ「聖霊の賜物」であるものが、ゴーガルデンでは、人間に要請されるべきものへと転化され、新しい創造の福音が、律法主義化される。律法主義化は、内面化と個別化と結びつき、人間が先ず新しくなれば、「他のすべてのものが全くおのずから順調に行くようになる」と明瞭に言い表される。ここでは、人間が個別的であると同時に社会的な存在であることが、無視されている。

コールブリュゲは、一種の静寂主義の危険がある。一方、ゴーガルデンは、表面的にはイデオロギー批判に見えるが、その実「一種の国家主義的保守性をもった、ブルジョア的イデオロギーが語られているのではないか。社会的革命・変革をはじめから拒否しており、現存するものを固定化し、その結果、福音の使信を個別化しているのでは？ ボンヘッファーは安価な恵みについて語るが、ゴーガルデンのように、私人的な事柄に固執する決断が重視される処では、『安価な決断』について語っているのかもしれない。人間が新しくなった後には、「他のすべてのものが全くおのずから順調にゆく」などと保証すれば猶更。そういう約束がどれほど幻想的であるか、多くの説教者はそのような約束をすることを放棄している。

このような説教は、ジャン・コクトーのように「わたしが存在するのだ、という信仰を私に吹き込んでくれ」と助けを求める声に対して、「決意して自分自身を把握することの中に現実的生活を獲得する」存在として人間を語るのは、効果的かもしれない。だが、福音的とは言えない。

¹⁵ ペーター・シュトゥールマツハー (ドイツ語: Peter Stuhlmacher, 1932 年 1 月 18 日 - 2025 年 4 月 5 日) は、ドイツの福音主義(ルター派)神学者、新約聖書学者。1972 年から 2000 年までテュービンゲン大学福音主義神学部新約聖書学教授として在任した。シュトゥールマツハーが提起する聖書神学という概念は学問的聖書解釈を霊的聖書解釈によって補うことである。シュトゥールマツハーにとって、聖書解釈、福音主義教会と宣教は密接につながって存在している。例えば、初代教会のキリスト者たちを模範とした教会による熱心な導きを彼は支持した。最古の共同体形態として家庭集會を強く推奨し、新約聖書の中心的主題として宣教を強調している。このような信念に基づいて、シュトゥールマツハーは福音主義教会内の敬虔主義者グループである生ける信徒共同体との結びつきを強めている。

第III節 留保

参考文献

ゴットフリート・フォイクト¹⁶

マタイ福音書 16・19¹⁷, ヨハネ福音書 20・23

教会の機能について語っている

バルト 教会教義学 第4巻「和解論」第3分冊の下 III/4

日本語版のページ数 313 頁

「正しい事柄が行われ、教会のわざが正しく行われる場合には、いわば一種の開放の行為、許し、解放すること、つまり、罪のゆるしを語りかけ、それを受け入れることが大切にされる¹⁸」

教会は罪に対して、これを赦すということに反応する。

罪の赦しの厳かな言葉は、ロマンチックに高揚させられてはならず、教会の召命の目的であり、教会の生命となるべきものを明瞭に語る言葉でなければならない。

「これ（開放）が行われない、または正しく行われないならば、教会

¹⁶ ゴットフリート・フォイクト ヨハネス・ゴットフリート・フォークト（1914年7月13日、ハイデナウ生まれ、2009年5月2日、ベルリン近郊のフレダースドルフで死去）^[1]は、実践神学を専門とするドイツのルター派神学者である。フォークトはヨハネス・フォークトの息子として生まれた。彼はライプツィヒでプロテスタント神学を学んだ。1942年にルターのクリスマス説教—神学と宣教—に関する論文で博士号を取得した。学業を終えた後、1942年からライプツィヒ＝ゴーリスの平和教区で牧師を務めた。1945年にはライプツィヒの学生牧師となった。1947年からはツヴィッカウの聖モリッツ教区の牧師を務めた。1950年から1958年まで、フォークトはリュッケンドルフの神学校で研究主任を務めた。1958年にはライプツィヒの聖パウロ説教者養成大学に研究主任として移り、同時にライプツィヒ神学校の講師となり、1979年に退職するまで教鞭を執った。

東ドイツ国外では、フォークトは主に説教テキストの説教的解釈集で知られるようになり、それらの著作は牧師たちが説教を準備する際の基礎となっている。

ライプツィヒ、グライフスヴァルト、イエナの各大学が何度も試みたにもかかわらず、フォークトが東ドイツの州立大学の教授に任命されることは、関係する政治機関の SED の意思決定者によって拒否された。彼は西ドイツの大学（1960年のミュンヘンと1962年のゲッティンゲン）からの2つのオファーを断った。当時の状況を考えると、東ドイツのキリスト教徒を見捨てることは受け入れられないと考えたからである。

¹⁷ マタイ 16・19 “わたしはあなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上でつなぐことは、天上でもつなぐられる。あなたが地上で解くことは、天上でも解かれる。” ヨハネ福音書 20・23 “だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。”

¹⁸ 和解論 III/4 真の証人イエス・キリスト 第72節 聖霊とキリスト教団の派遣 日本語 p313 井上良雄訳 「事が正常に行われ、教団の活動が良くなされている場合には、偉大な開放と許可と釈放が怒らざるを得ず、罪の赦しの慰めと受領が起こらざるを得ない。」

はその使命に背き、天国を閉ざし、人間に対して、それを開く代わりに天国から人々を締め出してしまうことになる。教会はそれらの人々に、誰に対しても開かれたままになっている扉を指し示してあげるべきだった」¹⁹(p988)

この後に、バルトは次のように語っている。

「**教団の従順、あるいは不従順、教団の『正当ナ』行為、或いは『不当ナ』行為は、単に世界的な射程を持つだけではない。教団が地上で行う事、或いは、行わない事は、天とかかわりを持つ。**教団の働きによって、神御自身が、崇められ、或いは辱めを受けて冒瀆され給う、教団が行なう事、行わない事が一正当にも開く事と不当にも閉じることを神御自身が、喜び、或いは悲しみ給う。神は、教団を通して地上で起ることに、決して拘束され給わないが、しかし、極めて親密に関与し給う」

このバルトの見解はブルームハルト以来のもの。

教会の“新しい存在”は静的なものではない。

「地上に教会が存在せねばならない。地上で、教会は、解き、つなぐ力を持たねばならない。罪を赦す力を持たねばならない。そうでなければ、(教会は)罪のかたわらを通り過ぎ、放っておくしかなくなる。天国は、地上における我々の働きを期待している。我々は共に、個々人として、この解く力を持つことが許されている。…あなたも罪を赦してあげなさい。自分と共に生きる人々を、イエス・キリストの教会へ召されている者、神の国に入るべく召されている者とみなすのがよい。神はキリストにおいて、地上に生きる人間を通じて、黄泉の扉をも克服しようとしておられる。何故なら、この解く力は深みに達し、なお解かれざるもののありうる天に至り、なお解かれざるものの多くある地上のもろもろの民の中に達し、更には地の下の死者たちの所までにも至る。**イエス・キリストの地上における力は、その教会の中にある。**」

一個人主義的束縛を破碎し、罪の赦しを社会的諸関係の中に取り入

¹⁹ 井上良雄訳「それが行われない場合、或いは正しく行われない場合には、教団は、教団への委託に反して、天国を閉じ、人間に対して天国を開くべきときに、また人間すべてに開かれている扉を彼らに示すべき時に、彼らを天国から締め出す。」

れる。

「我々の一切の行為の中心に、公的福祉の為にも、罪の赦しは存立せねばならない。様々な状況・時代・諸関係に対するゆるしが行なわれるべき。そうすればイエス・キリストを指し示す光が現れ、すべての国民に普遍的赦免が行なわれるようになる」

説教だけでなく、会衆自身も鍵を使用するべく導かれねばならない。⇒その為に不可欠な導きは、「会衆自身が主イエスの『天国を閉ざす者への災いの言葉』（マタイ 23・13²⁰、ルカ 11・52²¹、バルト前掲書 988 頁²²）のもとにある」ということを教えることだ。

主イエスは、審くためではなく、救うために来られたのであり、教会が遣わされるのも、審くためではなく、救うためである。

他の視点から…

審きを語らぬ説教こそ、まさしく審きを伴っているものであり、その審きは、これを聞かぬ者、聞こうとしない者において実現する（ヨハネ福音書 12・48²³）。罪の赦しが、その反対—**罪の赦しを留保**することができるのなら、一般的あたりさわりのない真理に墮し、ほかならぬ自分自身の真理性を失う危険に晒される。

ディートリッヒ・ボンヘッファー

「悔改めぬ者の罪を定め、これをつなぐことなしに、悔い改めた者をその罪から解くことは、教会には不可能なこと」。(解き放

²⁰ マタイ 23・13 “律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。人々の前で天の国を閉ざすからだ。自分が入らないばかりか、入ろうとする人をも入らせない。”

²¹ ルカ 11・52 “あなたたち律法の専門家は不幸だ。知識の鍵を取り上げ、自分が入らないばかりか、入ろうとする人々をも妨げてきたからだ。”

²² “教団は、許さねばならないときに禁じる、釈放すべきときに拘留する。その証の内容である罪の赦しは、人間に与えられない。この言葉を、＜場合によっては、二者択一において否定的・消極的なほうを選び、何かの物差しで（どのようなものなのか？）、こちらでは開きあちらでは閉じ、罪の赦しを説きには語り、時には語らず、しかも、そのような分裂した行為が天でも保証されていると考えてよろしい＞と理解するのは、異常に質（たち）の悪いやり方ではないのか。教団は、その奉仕を怠り転倒することなしに、自分に委ねられた天国の「鍵」を、天国を人間に閉ざすためにも用い得るであろうか。マタイ 23・13 やルカ 11・52 の「わざわざである」という言葉を聴き洩らし、**主イエスがここではっきりと「災いだ」と言っておられる行為の方を、二者択一であれ、教団に対して推薦し命じておられると解釈することがどうしてできるのだろうか。**”（日本語版 p313）

²³ ヨハネ福音書 12・48 “わたしを拒み、わたしの言葉を受け入れない者に対しては、裁くものがある。わたしの語った言葉が、終わりの日にその者を裁く。”

つことを)保留するのを止めることは、罪の赦しは疑わしいものにする。「**教会が、この解く鍵だけを用いようとするなら、信じる者から、赦しについての確信を奪ってしまう事になる。滅びに定められていることから救い出すことになっていない赦しとは一体何か？ということになるから。**」この態度は、教会論的帰結を産まざるを得ず、「自分で承知の上で、ドイツ告白教会から別れようとする者は、救いからも離れることとなる」として人々を立腹させる。

「このような（罪の赦しの）留保は、救いに役立ちうる」詳細な議論が必要。

（１）”サタンに引き渡すこと”と並行して考察する必要ある（コリントⅠ ５・５²⁴）—手続き全体で、その人の霊を救うことに役立つべき。

（２）罪の赦しと留保の間の区別をはっきりさせる。

A) 罪の赦し

何らかの条件に結び付けられるべきではない。無条件。

「条件が一切の災いのもと」

B) 留保

一つの条件に結びつく事が許される。つまり、約束の反対、一種の脅かし。

留保は、忘却を防ぐべく語るという点で、救いの力を持つことを証明する。過ぎ去った罪を想起せしめ、これを将来のために固定する。留保が死刑の判決を語るとしても、それでも、それは死に対決して語られる。つまり、究極的な救いのために、今、暫定的死刑が語られる。それによって、忘却と（忘却による罪の）圧迫とを防ぐ。

実例 ためらいつつ…

²⁴ コリントⅠ ５・５”このような者を、その肉が滅ばされるようにサタンに引き渡したのです。それは主の日に彼の霊が救われるためです。”

例1) ジョン・ウェスレー²⁵

「不信仰な者の滅びを証言することは、神の小羊について説教するのと同じように、立派なキリストについての説教である」と考えている。

例2) ジョージ・ホイットフィールド²⁶

目に涙を浮かべながら、ある説教の終わりで告げる。

「私は今や裁判官の帽子を冠^{かむ}ことをしたいと思う。罪ある方たちよ、私はそうしないわけにはいかない。あなた方に判決をくださねばなりません』。彼はおそろべき雄弁の力をこめ、主の言葉を叫ぶ。『のろわれた者どもよ、私を離れなさい』(マタイ25・41)」

例3) レンマー・ヤンセン²⁷

ある金持ちの葬儀で。左手で地平線と天との中間を指さし、右手で棺の蓋を叩きながら「ほらあそこにーこの男がもう焼かれている」

これらは、非福音主義的説教として拒否せずにはいかないような説教ではないのか？と問うこともできるが、こういう説教を早急に斥けるべきではない。

ヘルムート・ゴルヴィツァー

²⁵ ジョン・ウェスレー ジョン・ウェスレー (John Wesley、1703年6月28日(ユリウス暦6月17日) - 1791年3月2日) は、18世紀のイングランド国教会の司祭で、その後メソジスト運動と呼ばれる信仰覚醒運動を指導した人物。この運動から生じたのがメソジスト派というプロテスタント教会であり、アメリカ合衆国・ヨーロッパ、アジアで大きな勢力をもつに至った。特にアメリカではプロテスタント系で信徒数第2の教派である。聖化を強調し、『キリスト者の完全』を唱えた。これはウェスレー派のメソジストとキよめを強調するホーリネス運動に継承されている。

²⁶ ジョージ・ホウィットフィールド (ホイットフィールドとも、英語: George Whitefield、1714年12月27日 - 1770年9月30日) は、18世紀イギリスと植民地時代アメリカに大きな影響を与えたキリスト教の伝道者、イングランド国教会の牧師、説教者、メソジスト信仰復興の指導者である。

²⁷ レンマー・ヤンセン(*1850年11月6日、東フリジアのヴェルドゥマー・アルテンダイヒにて; †1931年5月18日、アウリッヒ近くのエーゲルスにて)^[1]は、東フリジアのストラックホルトの福音派ルーテル派牧師であり、東フリジアの有名なリバイバル説教者であった。

抑制した間接的な形で、ナチスによるユダヤ人迫害が起こった夜が過ぎたのち、悔い改めの日に、審きを現在のこととして告げ、それによって、ひとつの時代全体を、罪に「つないだ」。

「神の国が人間の処に到来する時、その扉の前に洗礼者ヨハネが立ち、この恐るべき叫びをあげて、扉を狭き門にするのであります。『まむしの子らよ、迫ってきている神の怒りから、逃れられると、お前たちに誰が教えたのか』（ルカ 3・7）。悔い改めという言葉は、扉を狭い門にします。しかしこの言葉は、我々の時代にあって、最も軽蔑され、しかも最も大切な言葉なのです。何故なら、今は悔改めぬ時代であるから、その悔改めぬということこそ、時代の悲惨の秘密だからであります。」

「具体的に事件の名を挙げる必要が本当になかったかどうかは、今になって私にとって極めて大きな問いとなっている」―試練と迫害の時代はまたやって来るからこそ、具体的な名を挙げるべきかどうかという問いをやめるわけにはいかない―というのは許される。我々は、留保をあえてする冒険もせず、従って、罪の赦しを告げる説教も、殆んど知らなくなっているから。

教会を守り祝福するために、使徒的な呪いが新約聖書の中にある（ガラテヤ 1・8 以下²⁸）。迫害者にではなく、違った福音を宣べ伝える者

²⁸ ガラテヤ 1・8～ “しかし、たとえわたしたち自身であれ、天使であれ、わたしたちがあなたがたに告げ知らせたものに反する福音を告げ知らせようとするならば、呪われるがよい。わたしたちが前にも言っておいたように、今また、わたしは繰り返して言います。あなたがたが受けたものに反する福音を告げ知らせる者がいれば、呪われるがよい。こんなことを言って、今わたしは人に取り入ろうとしているのでしょうか。それとも、神に取り入ろうとしているのでしょうか。あるいは、何とかして人の気に入ろうとあぐさしているのでしょうか。もし、今なお人の気に入ろうとしているなら、わたしはキリストの僕ではありません。兄弟たち、あなたがたにはっきり言います。わたしが告げ知らせた福音は、人によるものではありません。わたしはこの福音を人から受けたのでも教えられたのでもなく、イエス・キリストの啓示によって知らされたのです。…しかし、わたしを母の胎内にあるときから選び分け、恵みによって召し出してくださった神が、御心のままに、御子をわたしに示して、その福音を異邦人に告げ知らせるようにされたとき、わたしは、すぐ血肉に相談するようなことはせず、…”

に対しての呪い。迫害の時代を考えると、迫害者のための祝福を語った主イエスの言葉が妥当する。我々は“つなぐため”したがって、まさしく呪うために存在しているのではない、解くために、祝福するために存在する。アナテマ（呪い）を語る使徒パウロは、ローマ書9・3²⁹によれば、自分の同胞のために、自分自身が神によって呪われることを望んだ人。

このような呪いを、留保の究極点と見なし得るなら、この呪いが語られるのは、他者のための存在 Proexistenz³⁰を通じてのみ、福音主義的に可能となる。

「厳かなる言葉を語る者は、それを自分自身に対するものとして語らなければならない」（ローゼンシュトック・ヒュッシー³¹「冒険に帰れ」）。

²⁹ ローマ書9・3 “わたし自身、兄弟たち、つまり肉による同胞のためならば、キリストから離され、神から見捨てられた者となってもよいとさえ思っています。”

³⁰ 他者のための存在“Proexistenz”は、カトリック神学用語のようだ。以下は、ドイツ語版Wikiより。
他者のための存在は、“存在の擁護”と訳されている。存在の擁護（ラテン語の *pro existentia*、「存在のために」に由来）とは、神と人類のために生きるという人の根本的な態度を指します。キリスト教神学では、この表現は特にイエス・キリストに当てはまります。プロエグジスタンスとは、神が恵みを通して他者に与える命を意味します。神ご自身が、受肉後に十字架上で贖罪のいけにえとして命を捧げ、死から復活することによって（コリント第一¹⁵:3-4）、イエス・キリストにおいて「私たちのための神」としてご自身を啓示されました。これは、罪の結果として自ら曲がった人間（*homo incurvatus in se*）を罪悪感から贖うためです（ヨハネ3:16 EU 参照）。ベネディクト16世教皇の定義によれば、*pro existentia* という用語は一般的にキリスト教徒としての生活と、同胞（慈善）と共通善に対する謙虚な献身も表している。

³¹ ローゼンシュトック・ヒュッシー 1888年、ベルリンの裕福なユダヤ人家庭に生まれる。十代でキリスト教に改宗。ハイデルベルク大学で法学を学び、1912年よりライプツィヒ大学私講師。第一次世界大戦に従軍したのち、ダイムラー・モトローレン社に就職。このころ、フランツ・ローゼンツヴァイクらと親交を結び、1919年には出版社パトモスを設立、雑誌『被造物（Die Kreatur）』を刊行。1921年、フランクフルトで労働アカデミーを設立し成人教育事業に取り組む。1923年よりブレスラウ大学ドイツ法教授。1933年、ヒトラーが政権を掌握するとアメリカに亡命。ハーバード大学を経て1935年よりダートマス・カレッジ社会哲学教授。引退後も同地に留まり、1973年死去